（５）生物多様性の保全

ア　生物多様性の保全に配慮した植栽種とする

クヌギ・コナラなどの在来種を植栽し、昔ながらの武蔵野の雑木林の植生を復元している。

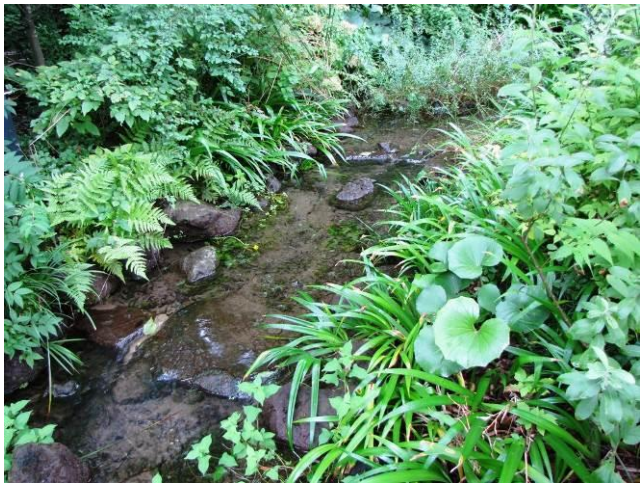
野生では希少となった植物を植栽し、種の保全の場となっている。

イ　生物の生育・生息空間の整備

池をつくることで、水に関係する多くの生きものの生息場所となっている。

写真提供:清水建設株式会社技術研究所

変化のある流れをつくることで、流水性の生きものの生息場所となっている。



多くの草地性の生きものが住めるよう多様な草丈がある草地として整備・管理している。

凡例　　青字：望ましい事例

落ち葉溜めを設置し、虫などの住みかとなるほか、地域内の物質循環を促進している。

擁壁を石積みとするなど、生きものが生息しやすい多孔質な空間をつくっている。

ウ　既存の生物多様性の保全

開発地内の既存の樹林を残すことにより、地域の生物多様性を保全している。

エ　生物多様性に関する普及啓発の推進

説明板を設置し、生物の生息空間として整備したことや意義などを広く周知している。

生物種の解説板を設置し、利用者に理解を促している。

凡例　　青字：望ましい事例

コラム：「東京に“生きもの”が住む空間を作る意味」

東京の都市部に生物の生育・生息空間を作る意味はあるのでしょうか。

まず、都市化が進み自然地が少なくなり、もともと住んでいた生きものの種類や数が減ってしまった東京だからこそ、生きものたちが住める空間を作っていく意味があります。

トウキョウサンショウウオやタマノカンアオイなど、東京や多摩という名が付き、地球上でも東京近辺にしかいない生物種もあります。今は希少種となっていますが、昔はもっと見られたのかも知れません。東京に東京の生きものがいるということが、地球上の生物多様性からもとても大事なことなのです。

次に、日本の人口の１／１０という多くの人が住み、働く東京だからこそ、身近に生きもの空間があることに意味があります。それは、多くの人の目に触れることで、生きものや生物多様性のことを多くの人に知ってもらい、感じてもらうことができるからです。

さらに、都心居住型マンションなどの建設も進んでおり、都心が「ふるさと」となる子供達も増えている中、都心で生まれ育つ子ども達が身近に生きものに触れ合えることも重要なことです。幼児期における自然体験は人間としての成長過程において重要な役割を果たすともいわれています。

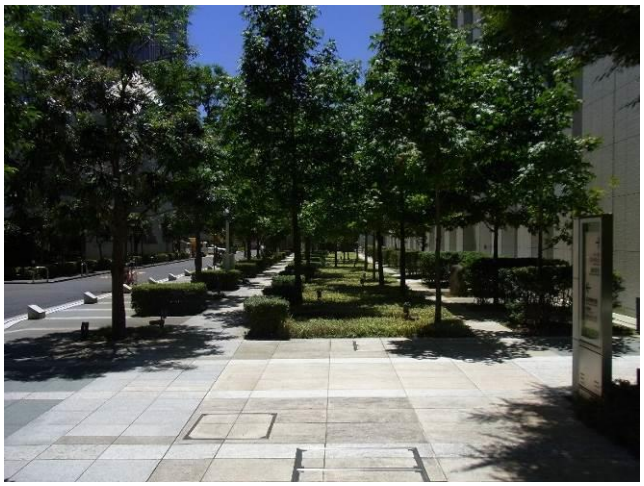
また、自然豊かな国「日本」の「ふるさと」としての自然観や文化などを認識して世界において活躍するためにも、多くの人が生まれ育っていく東京で生きものと触れ合えることも大切です。

都心の公開空地でも虫捕り網をもった子供たちが見られるようになるといいですね。

（６）その他公開空地等の価値の向上に資するもの

ア　照り返しを抑えるなど、快適な空間を創出する

歩道状空地に高木や低木を組み合わせて植栽することにより、照り返しを抑制している。



イ　建築物の壁面や屋上、公開空地内の擁壁等の緑化を促進する

道路沿いの壁面やバルコニー、屋上の緑化など、地上部から視認性の高い建築物上の緑化を促進することにより、潤いと親しみの感じられる街並み景観を形成している。

長大な壁面や構造物等の人工物を緑化することにより、利用者への圧迫を軽減し、緑量を感じることができる空間を形成している。

凡例　　青字：望ましい事例

コラム：「みどりの質を高める」

近年の都市緑化への関心の高まりから、樹木等のみどりの量を増やす議論が盛んとなっており、東京都においても平成 14 年から緑化計画書により、みどりの量の確保の義務化が行われています。さらに、平成 19 年からみどりの質を高めるべく「公開空地等のみどりづくり指針」の運用を行っています。民間事業者の真摯な対応により、これまでに多くの質の高い公開空地が設置されています。

しかしながら、一部の公開空地では、土壌や立地等の周辺環境に適合した樹木の植栽がされていないことが原因で、生育に問題がある樹木が見受けられています。そのため、日頃の植生管理を行う中で、必要に応じて樹木医や造園家など専門家のアドバイスを求めるなどの事前対策を講じ、みどりの質を高める努力が求められます。

特に、みどりの質を高めるためには、巧みな造園技法による美しい美観や配植を施していく必要があり、これらの能力を持った造園家等による施工が求められています。

撮影：晴海トリトンスクエア